



平和資料館 草の家 だより

No. 94

2007年2月25日発行



草と草の根の連帯をあらわす
草の家のシンボルマーク

〒780-0861 高知市升形 9-11 Tel 088-875-1275 Fax 088-821-0586
E-mail: GRH@ma1.seikyō.ne.jp <http://ha1.seikyō.ne.jp/home/Shigeo.Nishimori>

日本を離れて・・・

金英丸

去年の12月13日、高知を後にして帰国の道へ旅立った。まるで高知との別れを悲しむ私の胸中を表すようにチラホラと雨が降る中、岡村館長夫妻をはじめ多くの方々が駅まで見送りにきてくださった。いよいよホームから汽車が離れる瞬間、感謝の気持ちと淋しさに涙が流れた。高知の皆さん！ありがとう！

帰国の旅はピースボートに乗って博多から釜山へ帰る道であったが、私にとっては新しい舞台への挑戦でもあった。今回のピースボートの船旅は日韓共同の「ピース&グリーンボート」と名づけられ、日韓からの参加者300人が乗船し、釜山—博多—香港—ベトナム—フィリピン—釜山—博多を15日間で旅するクルーズであった。

私には日韓の参加者やスタッフによる船内のプログラムをコーディネーターする役割が与えられた。今回の仕事は大規模な韓国の市民運動と初めて出会う機会でもあったが、日本で平和運動を始めた私には心配もあった。

北朝鮮の核実験以降、東アジアの情勢が緊迫している中、日韓の市民がともに考えなければならぬ課題として、在韓・在日米軍の再編、憲法九条、在日朝鮮人、東アジアの非核化などのテーマをとりあげ、いくつかの共同企画を行った。特に「自衛隊が北朝鮮を攻撃する日」というタイトルのプログラムでは、北朝鮮の「脅威」を口実に日本で主張されている核武装論、憲法改悪の危機に対して、

豊富な南北交流の経験を持つ韓国側の専門家からの意見が述べられ、多くの参加者から反響を呼んだ。東アジア地域全体を視野に入れた平和問題を考える必要性と、平和憲法を守るための市民連帯の重要性などが改めて確認された有意義な時間であった。今後、10年間の長期計画を立て、市民による東アジア平和の実現を目指して航海を続ける「ピース&グリーンボート」に多くの期待と希望を託したい。

年が明け、1月にはカナダのバンクーバーで3週間ほど過ごした。新しい活動の下見のためでもあったが、印象に残ったのはアメリカメディアのイラク関連報道だった。ちょうど米政府のイラクへの追加派兵の発表もあり、連日イラク関連ニュースがトップを飾った。毎日、どんどん増えて行く米兵の死者の数や、女優ジェーン・フォンダがベトナム戦争以来に初めて加わった反戦デモの話題など、イラクの現実を見極めようとする動きが感じられた。既にアメリカでさえ過ちだと認めているイラク侵略を、最後まで支持する勢力は安部首相や日本政府くらいだろう。いまま海上自衛隊と航空自衛隊は米軍のために給油し続けているし、イラクへ米兵と武器を運んでいる。一方カナダはアフガニスタンに兵隊を送っているのだから、このことはメディアで大々的に取り上げられていた。

日本の市民たちがワイドショーによる殺人事件や北朝鮮バッシングの報道に洗脳されつつある今

日でも、イラクでは戦争は終わっていない。2月13日、北朝鮮の核開発をめぐる開かれた6国会談では朝鮮半島の非核化と平和体制づくりを目指して多くの進展があった。しかし、拉致だけを言い続けて朝鮮総連に対する組織的な弾圧を行っている日本政府や、6国会談に対する否定的な展望ばかりを報道する日本のメディアを見ていると、

本当に日本は東アジアの平和の実現を望んでいるのか疑わざるを得ない。いまこそ日本社会は外に目を向け、より広い世界の動きを見極める必要がある。私もこれからはより広い視野を持ち、平和のメッセージを高知の皆さんにも発信しつづけて行きたい。

幡多ゼミ報告と平沢基地問題

日渡 あゆみ

新年を迎えながらも大学4年生のため卒業論文に四苦八苦していた1月の下旬、四万十にある幡多ゼミナールで韓国の高校生との交流会があった。卒業も心配だけれども「一期一会が大切！！こんなチャンスは明日にはもうない。」と思い、論文も片隅に参加。韓国の高校生約15人と引率の教員5名との交流をした。

雨とみぞれの降る中、四万十町にある津賀ダム建設時に強制連行されてきた朝鮮の労働者や日本の労働者がどういった生活を送っていたかなどの説明を受け、実際にその場所に立ってみる。そして朝鮮人労働者の遺骨が埋められた場所で慰霊を。たった数十年前には、いま目の前にいる朝鮮の仲間と私達日本人の間に「優劣」という勝手につくりあげられた間違ったものさしがあって、ひどい扱いをしていたのだと思うと全身に鳥肌がたってしまい、なんとも言えないやるせなさで谷底にある労働者が運んだという石の山を見ていた。

いま私たちは、一緒にサッカーやキャッチボールをして遊び、一緒にお風呂に入り抱き合いながら語り合うことができる。なんて幸せなことだろう。あたり前のことでもそう感じてしまうのは過去の歴史を生きた人々に目を向けてこそ。この機会を通して仲良くなった韓国の友達は私たちに向かって「ファミリー」「ベス

ト」と言ってたくさんハグをしてくれた。「一度会ったら友達で、毎日会ったら兄弟だ♪」なんて歌があったが、やはり人種や国籍を超えても、たった1日の出会いであっても、同じ人間である限り心の距離は越えられるようだ。本当に幸せな出会いである。こういった出会いが少しでも多くなれば「人権と平和」への意識も高まるのではないだろうか。またファミリーのみんなとキャッチボールをしたいなあ。

ちょうどここで書き終えようとしているところへドキュメンタリー映画監督、中井信介さんからメールがきた。角川学芸出版のWebマガジンにおいて政治評論家の姜尚中さんとの対談をしたとのこと。中井さんは米軍基地問題に関する映画を撮っており、昨年1月から韓国の平沢の米軍基地拡張問題に反対する農民を追ったドキュメンタリーの映画を作成している。年末には愛媛と高知を訪れ、私たちと一緒に話をした。基地拡張闘争をしている、ある70才のおじいさんは「他の土地に行って、農業もできずにご飯だけ食べて、空を見あげて暮らすなんて、生きていないと思えない。」と言うそう。そのおじいさんが16才の時には、同じく米軍による強制収容があり、何としてもふるさとを離れまいと穴を掘った土の中で暮らしていた。「基本を守らなくてはいけない、中心を失っては

いけない。自分たちは土地を売った覚えもないのに、強制的に土地を奪われる、これは人間としての基本を失っている。盧武鉉大統領にも故郷があるはずだろう、この痛みがわからないのか。」と怒るおじいさんにとっての中心は、ただ自分が望む土地を耕して農民として暮らすこと。人を殺す戦争よりも人を生かす農業を！！と声をあげる農民の声がどれほど尊いものか。けれど住民の立ち退きが決まったのは新年を迎えてすぐのこと。1月に私が出会った朝鮮楽器チャンゴの先生もまさに平沢の住民闘争の最前線にいた方で、名ばかりの民主主義の中で市民の人権が

どれほど軽視されているかを物語ってくれた。けれども住民闘争は形を変えて続いている。彼らだけが闘えばそれですむことだろうか。

強制連行の歴史から数十年たった今でも「人間としての基本」を奪われることは以前と変わりなく続いている。米軍再編の問題はアジア全体の問題であり、世界の問題である。今こそ「誰かの問題」としてではなく自分達の問題として多くの「ファミリー」と一緒に立ちあがりたい。

日本軍性奴隷問題解決を求める韓日同時証言集会を開いて

高知大学3回生 杉村 直哉

1月27日に「日本軍性奴隷問題解決を求める韓日同時証言集会 in 高知」を高知大学の210番教室で行った。この同時集会は日本で8ヶ所、韓国では22ヶ所で証言集会や講演会など様々な企画が行われた。当日は大学生や高校生など30人ほどが参加した。この会では韓国の打楽器チャンゴの演奏や歌の後、映画「ナムムの家」を上映した。

この映画は1994年につくられたもので、韓国ソウル市内にあるナムムの家(名乗り出た日本軍性奴隷被害者たちが共同生活をしている家、ナムムとは韓国語で「わかち合い」という意味)でのハルモニたち(韓国語でおばあちゃん)の日常を記録したドキュメンタリー映画だ。なぜこの映画を上映したかという被害者がどのような思いで日常を送っているのかを知り、そして日本政府の被害者に対する補償や賠償のあり方について参加者と共に考える機会を持ちたかったからだ。

映画の中でハルモニたちは「もう死にたい」「日本政府は私たちが死ぬのを待っている」とつぶやく。日本政府が

日本軍性奴隷被害の事実を認め謝罪や賠償を行わないことによってさらに被害者を傷つけ苦しめているのだ。日常生活でのハルモニたちの「つぶやき」から日本政府が日本軍性奴隷被害者と向き合っただけでよかったことがよくわかった。

この映画が撮られてから12年たった。映画に出ているハルモニたちの中にはもう亡くなられた人もいる。ある韓国から来た留学生は映画を観て「ある日本人に戦争の被害にあった国の人たちは感情的にならずにもっと冷静になって話し合わなければいけないと言われたが、この映画を観て被害者一人一人の思いは無視できるものではない」と感想に書いていた。歴史を学び被害者の思いや訴えを聞くことが大切なことだと思う。この集会を行った前の水曜日に韓国ソウルにある日本大使館前では日本政府に対してこの問題の解決を求める745回目(2007年1月24日(水)までの回数)の「水曜デモ」が行われた。これからも日本政府に対して問題解決を訴え、また様々な人と日本軍性奴隷問題の事実を知り考えていく機会を持ちたいと思う。